

アイン・ランドと新自由主義

藤 森 かよこ

要旨

「アイン・ランドは新自由主義の源泉のひとつである」と批判的に言われている。このアイン・ランド批判は2点において知的怠慢の産物である。第一の怠慢は、新自由主義 (neoliberalism) に関する理解不足である。新自由主義を「強欲資本主義」と同義語として邪悪なものとしてみることは、現行の知的風土の前提である。しかし、新自由主義と「新自由主義と呼ばれる現象」とは別である。新自由主義の実践が、その原則からかなり逸脱したものであることは、新自由主義批判者が認めている。そもそも賢人政治的期待を政府は満たすことはできない。現代と未来は、新自由主義的経済政策の「創造的破壊」を通過するしかないのかもしれない。新自由主義は未完のプロジェクトなのだ。

第二の知的怠慢は、ランドが唱える思想に使用される言葉の意味を検証せずして、ランドは利己主義を肯定したのだから強欲資本主義の提唱者であると断じることである。彼女が肯定した「利己主義」とは、長期的視野に基づく合理的なものである。「気まぐれな自分勝手」では長期的には自己利益は確保できない。ランドが支持した「道徳としての資本主義」は、あくまでも等価交換をする自由な交易者どうしの関係を意味する。搾取と物理的強制力から解放された自由な個人間の関係を条件にしている。1980年代から各国で採用された新自由主義政策が生み出したサイバー資本主義や金融資本主義や、21世紀になってからの金融危機など、アイン・ランドの思想とは遠く離れている。

キーワード：新自由主義、強欲資本主義、創造的破壊、利己主義、客観主義

1 はじめに

アイン・ランド (Ayn Rand: 1905-1982) は、毀誉褒貶の激しい作家であり思想家である。どちらかという、批判非難の対象になることが多い。たとえば、2007年や2008年にアメリカを襲った金融危機の思想的元凶をアイン・ランドだと指摘するのみならず、アイン・ランド的なものがアメリカ合衆国を劣化させてきたと指摘する評者がいる (Weiss, 2012)。

YouTube映像の中には、「アイン・ランドはフィリップ・ロスチャイルドの愛人であり、新世界秩序 (New World Order) を構築し世界を支配し、人類を家畜化しようとする秘密結社のイルミナティ

(illuminati) の走狗であった」と言うような類のものまである。日本においても、ランドを「世界を操る支配者」のひとりとして、かつ「新自由主義の理論的指導者の一人」として批判する評者がいる (馬淵, 2014, 133-35)。

このような根拠のない陰謀論の類は無視できる。だが、アイン・ランドが新自由主義の源泉であるという見解や、アイン・ランドの思想がアメリカ合衆国を劣化させてきたというような見解については反論を試みなければならない。なぜならば、このような見解は、本論で述べるように知的怠慢の産物だからだ。それも二重の意味で知的怠慢の産物である。まずは、「新自由主義」 (neoliberalism) に関する認識不足において。さらに、アイン・ランドの思想に

関する理解不足において。

本論2においては、新自由主義に関する確認をする。3においては、ランドの思想を確認する。特に彼女の特異な資本主義観を確認する。4の結論において、彼女の思想と新自由主義と批判されている事象には関係がないことを明示する。

本論は、2008年発表の拙論「アイン・ランドの資本主義観---反ビジネス文学風土の中でビジネスマンを祝福した*Atlas Shrugged*」(藤森, 2008)と部分的に記述が重なる。本論は、2008年の拙論で十分に論じることができなかったことを補足するために書かれたからである。

2 新自由主義について

新自由主義という語が1938年に生まれて以来、その概念は多様である。したがって、世界基準として定められた定義が存在しない。新自由主義を自称するイデオロギー的陣営があるわけでもない(高田, 2011, 39)。本項では、まず新自由主義の歴史を概観してから、数種類の定義を確認し、新自由主義擁護論も確認する。

2.1 新自由主義の小史

英語版Wikipedia(2016年9月10日閲覧)によると、1930年代の世界的不況が経済的自由主義の失敗とみなされたことに危機を感じた25人の知識人が、ジャーナリストのウォルター・リップマン(Walter Lippmann)を中心に集結し、ウォルター・リップマン・コロキウム(Walter Lippmann Colloquium)を1938年にパリで開催した。そのコロキウムが「自由放任資本主義」(laissez-faire capitalism)ではなく、新しい自由主義を提唱することに合意した。それが新自由主義の始まりである。新自由主義という用語を造語したのは、ドイツの経済学者のアレクサンダー・ラストウ(Alexander Rustow)だった(Turner, [2008] 2011, 4)。

社会思想としての自由主義は18世紀からイギリスを中心として生まれたが、現在の新自由主義は、1920年代から30年代の経済危機に対する国家権力

の強大化に対して自由主義知識人の間に警戒や恐怖が生まれたことに端を発している。この時期、世界は、ロシア革命や大恐慌、ドイツやイタリアにおけるファシスト政権の台頭や激化した労働運動にさらされ、資本主義の未来に疑いを抱き、社会主義を待望するようになっていた(高田, 2011, 41)。だからこそ、自由主義と市場経済と政府の管理統制からの個人の自由を求めて、ウォルター・リップマン・コロキウムは開催された。ただし、第二次世界大戦が始まると、知識人の交際の交流も困難になり、この企ても短命に終わった。

このコロキウムに参加したフリードリッヒ・A・ハイエク(Friedrich A. von Hayek)やルドヴィッヒ・エドラー・フォン・ミーゼス(Ludwig Edler von Mises)は、「自由放任資本主義」を貶めることを拒否し、コロキウムに同調はしなかった。しかし1947年にスイスのモンペルランに集結し、モンペルラン協会(Mont Pelerin Society, MPS)を設立した。その後、コロキウムに参加した自由主義経済学者たちの多くがモンペルラン協会に合流した。この経緯から、モンペルラン協会は新自由主義イデオロギーの歴史的源流となった。

とはいえ、1990年代後半ぐらいまでは、この用語が一般的に言及されることはなかった(高田, 2011, 40)。ハイエクらが、モンペルラン協会を設立した1940年代から50年代は、ケインズ経済学が主流になりつつある時代だった。ケインズ主義の立場からの経済政策が各国で採用されていた。ハイエクらの新自由主義は時流にあわないものであったので、少数の保守的知識人の孤立した運動として、忘れられていた(高田, 2011, 42/友寄, 2006, 137)。では、なぜ1990年代後半から、新自由主義という用語は頻繁に言及されるようになったのか? それも明確に否定的意味あいだ。

1960年代末から1970年代に入ると、高度成長時代が終わり、インフレと高失業率、経済停滞が長期に並存するスタグフレーションが続いた。通貨危機、財政破綻、発展途上国の貧困と債務危機、公害と地球環境の危機の問題が噴出した(友寄, 2006, 137)。それまで各国が採用していたケイン

ズ主義経済政策を批判してきたハイエクやミルトン・フリードマン (Milton Freedman) の理論への関心が増した。

特に1970年代に中東諸国の指導者たちが原油価格を引き上げたことの影響は大きかった。1973年の第四次中東戦争は、石油輸出国機構 (OPEC) に欧米諸国に圧力をかける口実を与えた。イスラエルを支援するアメリカへの懲戒と、自分たちの持つ石油という資産の有限性に気がつき、彼らは原油産出量を削減した。そのために1973年第四次中東戦争勃発時に1バレル3ドルだった原油は、1974年末には約12ドルになった。言うまでもなく中東から輸入する石油や天然ガスに依存する西側諸国 (日本を含む) は混乱に陥った。激しいインフレが起きた。株式市場は暴落した。産業活動は鈍化した。英米政府は、どちらも経済介入し、国内の石油消費量を削減し物価高騰の抑止を試みた。経済の健全性は急速に崩壊した (ワプショット, 2014, 153)。1979年2月に起きたイラン革命により、世界の原油価格はまたも急騰した。同年11月にはテヘランのアメリカ大使館職員66名が人質に取られた。アメリカ軍による解放作戦も失敗し、アメリカの威信は地に落ちた。さらに1980年にイラン・イラク戦争が起きた。これに懲りたアメリカが、軍産複合体の意を受けて、中東におけるアメリカの安定的利権確保のために、中東に介入した。1990年の湾岸戦争や、2001年の9.11同時多発テロや、2003年のイラク攻撃に、2016年現在のISISをめぐる中東における大混乱は、石油利権を確保するための欧米の介入の失敗の産物であることは、また別の話であるが。

このような状況のなかから、イギリスでは新自由主義の旗手とされたマーガレット・サッチャー (Margaret Thatcher) 政権が1979年に誕生した。同じく新自由主義者のロナルド・レーガン (Ronald Reagan) 政権が1980年に、アメリカに誕生した。

高田太久吉によると、「歴史的な前例のない経済危機に対処するために、なかでも米英政府と財界は、労働組合の交渉力を弱めるために、旧来の産業を基盤にした戦闘的労働組合を産業もろとも解体し、失業率の上昇を野放しにし、民営化によって公共サー

ビスを資本蓄積の軌道に組み込み、企業と富裕層が負担する税率を大幅に引き下げ、途上国を含む貿易相手国に市場開放と規制緩和を求める自由化政策を追求した」 (高田, 2011, 43)。

要するに、モンペルラン協会の自由主義知識人が提唱した新自由主義の原則は、米英政府や財界の意図を大義名分化するために利用されたというのだ。ハイエクが1974年に、フリードマンが1976年にノーベル経済学賞を受賞したのも、このような政治的背景があったからだ (高田は示唆する)。

ハイエクは、1955年に財界の支援を受けて、新自由主義の普及センターとして、経済問題研究所 (Institute for Economics Affairs, IEA) というシンクタンクの創設に関与した。このシンクタンクは、後のサッチャー革命の理論的拠点となった。1973年に設立されたアメリカのヘリテージ財団 (Heritage Foundation) や、1974年に設立されたカナダのフレイザー研究所 (Fraser Institute) などの世界有数のシンクタンクは、少数の知的エリートの思想、つまり新自由主義を大衆に伝道する機能を担うためのものだった。大学の経済学や経営学を含む社会科学のカリキュラムも新自由主義中心に構成された (同, 45-47)。かくして、1980年代から新自由主義の影響力は強くなった。

しかし、1990年代になると、アジア通貨危機にロシア危機、ラテンアメリカの危機が続いた。巨大ヘッジファンドのLTCM (Long Term Capital Management) が破綻した。2000年代初頭にはアメリカのITバブルが崩壊し、アメリカのナスダック市場は大暴落を見せた。アメリカ政府は経済対策として大規模所得減税を実施し、FRB (Federal Reserve Board) は利下げを繰り返した。2001年9月に同時多発テロが起き、さらにFRBは緊急利下げを行った。最終的には2004年5月まで1%という低金利政策が続き、不動産や住宅や債権バブルが起きた。そして、2007年にはサブ・プライム住宅ローン危機が起きた。そこから連鎖的に発生したのが、2008年のリーマン・ショックを含む一連の国際的金融危機であった。

これらの危機を契機に、ポスト・ケイジアン陣営

による新自由主義的経済政策批判が活発化した。また、新自由主義と目される研究者や新古典派経済学陣営内部からも、自己批判の動きがある（同、2011、51）。また、新自由主義の国際的牙城とされる国際通貨基金（IMF）や世界銀行からも、経済成長と雇用創出のために金融市場に対する規制を強化する必要があると指摘する声もある（同、52）。

2.2 新自由主義の定義

新自由主義の概念は多様であり、定義が定まっているわけではないことはすでに言及されているが、基本的な原則（generic principles）というものはある。レイチェル・S・ターナーによると、新自由主義は4つの原則から成っている（Turner, [2008], 2011, 4-5）。第一の原則は、市場の秩序（the market order）に重要性を置くことである。資源を効率的に割り当て分配し、個人の自由を守る必要不可欠なメカニズムとして市場はある。束縛されない市場は、物やサービスの自主的交換から社会に自然の秩序を生む。それが生産性の効率と社会の繁栄と自由を促進する。市場の失敗とか暴走というものもあるはずだが、新自由主義は、それよりも政府の失敗を危惧する。

第二の原則は、法の支配の重視である。市場社会における主体的な個人間に生じる軋轢を規制する法を行使する国家の役割の大きさを新自由主義は重視する。国家の機能とは、個人の自由の保持を通して、社会的統一と安定を確保することにある。

三番目の法則は、国家の干渉を最小限にすることの提唱である。自由な国家は法の行使において強くなければならないが、かつ最小でなければならぬ。政府の役割と責任は公衆の利益に決定される。法と秩序を確保し、公共善を提供し、市場の秩序を守る憲法を保持することが政府の第一の責任である。

四番目の法則は、これが最も大きな原則なのだが、私的所有権の保護である。私的所有権を認めるシステムは、新自由主義の秩序の必要不可欠な部分を形成する。私的所有権こそが、集団に対して個人の価値を守る。国家が合法的に侵犯することがない

私的所有権と自治の領域なくして、公と私を分けることなくして、個人は個人としての生を十全に生きることができない。私的所有権こそ自由の要である。たとえば、すべてが国有化された社会においては、個人が国家の政策に反対する演説をする空間を確保できない。国家が管理することがない空間があるからこそ、言論の自由はある。私的所有権のない国家において、個人は国家の奴隷である。

これらのターナーが言うところの新自由主義の原則は、古典的自由主義思想の原則と同じであるので、自由社会においては、あまりに当然のことであるので、いまひとつ新自由主義がどういうことを推進しようとするのか、つかめない。それらは、ハイエクの『隷属への道』（*The Road to Serfdom*）に詳しく記述されているし、その内容は、拙論「衝動から思想へ—アメリカ保守主義の誕生とハイエク『隷属への道』」（藤森、2013）に紹介したので、ここではこれ以上は取り上げない。

かわりに新自由主義擁護論者の八代尚宏が言う新自由主義の具体的な方針が、新自由主義に対する理解の大きな助けになるだろう。まず第一に、「資源配分面では、市場競争を重視し、それを妨げるような企業の行動をいっさい禁止する。これは、企業の形態をとらない農業協同組合や、地方自治体などの行動についても同様である」（八代、2011、7-8）。電気や水道やガスなどのライフラインを構成するインフラ関連や、医療や介護や保育の分野については、事業者が営利か非営利か問わずに、供給義務や行為規制をすることで、公共性・非営利性を担保する。新自由主義は、決して自由放任資本主義ではない。自由競争に委託できない分野に関しては規制する。市場と政府の役割分担を明確にするのが新自由主義の考え方である。政府の規制の多さによってビジネス・チャンスを壊すことを回避したいが、市場の暴走は規制する。

第二に、「最小のコストで最大の効果を達成する、効率的な所得配分政策をとる」ことである（同、8）。たとえば、所得配分政策は、所得移転を管理するために行政機構が肥大化する危険があるし、少しでも多くの給付を得るために就労を抑制す

る人々も必ず存在する。所得移転は、それを真に必要とする人々に直接に届くような仕組みづくりが必要だ。労働者保護も、年功賃金や過度の雇用保険により正社員の既得権を守るのではなく、男女、年齢、働き方の違いを問わず、同一労働・同一賃金をめざすべきだ（同、8-9）。既得権を持っている側からすれば、このような新自由主義政策は労働者いじめに見えるかもしれないが、労働市場において、より大きな公正さが実現されることは長期的視野からみれば個人の権利保護と社会の繁栄を導く。既得権を持つ人々からすれば、新自由主義は「創造的破壊」(creative destruction)を伴う。

第三に、「政府によって運用される社会保険制度は、その負担としての保険料が確実に徴収される公平な仕組みを構築する」ことだ（同、9）。公平さの実現こそ、新自由主義が重きをおくことである。たとえば、零細農家や中小企業や郵便局を、国内外の大企業との市場競争から保護すべきであるという意見は、いかにも正しいように見える。人口減にさらされ、産業もないので税収の少ない地方に財政移転（税金投与）を増やすことは、いかにも正しいように思える。しかし、そのような政策は、政府の保護（税金投与）に依存する人々と、その保護（税金）を与える人々の間に亀裂を生む。自立できない産業や事業は自立できるよう努力するべきである。地方は地方で自立する地方分権をめざすべきだ。社会は共同体ではあるが、共同体は、フリー・ライダー（ただ乗り）の生活保障をするためにあるのではない。成員の公平な負担がなければ、共同体は維持できない。共同体の維持に責任を持とうとしない成員は共同体の維持に責任を負う人々から疎外される。それを冷酷とか残酷とか評するのは間違っている。成員の立場に応じて、共同体維持と成員の最低限の生活保障（セイフティ・ネット）のコストを支払う仕組みの構築は、すべての個人が幸福の追求を自由にするための条件である。

ここまでくると、新自由主義の具体的ありようが明確になってくる。

ところで、前述の高田太久吉の定義によると、「新自由主義は、1970年代に資本主義の危機に直

面した企業が政府と連携して、経済危機を克服し、企業利潤を回復し、企業と経営者の権力を強化するために打ち出した一連のイデオロギー的、経済理論的、政策的プロジェクトの総称」である（高田、2011、39）。高田は、さらに「この階級的プロジェクトは、米英を先頭とする欧米諸国の政府と財界が提供する資金、人材、組織を動員した戦略的な思想・教育改革と労働者攻撃によって、経済社会政策の大幅な組み換えと企業・経営者の権力の強化を実現した」と述べる（高田、2011、39）。

同じく左派系研究者の友寄英隆による定義は「新自由主義は、現代の資本主義体制を擁護し、その強化をはかるブルジョワ・イデオロギーの最新の支配形態であり、20世紀後半以来、多国籍企業の展開とともに、世界資本主義の主要な潮流として政治、経済、社会、教育、文化など各分野の諸現象に現れている。その特徴は、市場原理を経済政策はじめ社会のあらゆる分野に押し広げて、競争によって経済の効率性と社会の活力を発揮させるとしている点にある。また、その特徴は、グローバル化した世界市場での競争を促進して、大資本による労働者・国民への支配と搾取の強化、資本蓄積の発展を点にある」（友寄、2006、93）。日本の左派系研究者の新自由主義の定義は、かなり否定的なものである。

ターナーが示す新自由主義の原則や八代が示す新自由主義政策の目標と、高田や友寄が示す定義のギャップは非常に大きいと感じられる。どうして、このような違いがあるのだろうか。それは、高田や友寄が、新自由主義の原則と実践の諸相を分けて考えずに、新自由主義の（今までのところの）実践の失敗にのみ注目しているからである。

2.3 新自由主義の原則と実践のギャップ

新自由主義の原則と実践の乖離について明確に指摘したのは、デイヴィッド・ハーヴェイ（David Harvey）であった。ただし、彼は原則（principles）ではなく、公式教義（template）と呼んでいるが、彼は、「新自由主義とは何よりも、強力な私的所有権、自由市場、自由貿易を特徴とする制度的枠組みの範囲内で個々人の企業活動の自由

とその能力とが無制約に発揮されることによって人類の富と福利が最も増大する、と主張する政治的経済的実践である」と簡潔に定義した (Harvey, [2005], 2007, 2/渡辺監訳, [2007], 2014, 10-11). と同時に、各国で実践されてきた新自由主義政策が、新自由主義理論の公式教義 (template) から系統的に (systematic) 逸脱していることを指摘した (Harvey, [2005], 2007, 70-81).

ハーヴェイが挙げる「新自由主義の公式教義と実践の乖離」の例を見てみよう。たとえば、ヨーロッパ諸国は、自由貿易を主張しているが、自国の農業は保護している。特定の業界の利益のために、国家介入がなされたりする。たとえば、新自由主義政策では、規制緩和をして金融機関の影響力を拡大するが、これらの金融機関が破綻の危機に襲われたときには、市場の淘汰に任せるべきであるにもかかわらず、金融機関を救済してきた。1987年から88年にアメリカで貯蓄貸付組合危機が起きたとき、約1,500億ドルを政府は投入した。1997年から98年にヘッジファンドのLTCMが破綻したさいには、35億ドルが投入された。公的支援といえば聞こえはいいが、国民から徴収する税金で、経営を失敗した金融機関を救済した。2008年のリーマン・ショックのときは、リーマン・ブラザーズは救済せず、AIG (American International Group, Inc.) には公的支援をした。金融機関が困難に陥ったときに市場に介入して、これらの機関を救済することは、新自由主義の原則とはあいられない。かくのごとく、新自由主義の実践は、恣意的で実にご都合主義的である。

また、新自由主義国家が作る法律や規制の枠組みは、ほとんどは企業に有利であり、特定の業界 (エネルギーや製薬業界、アグリビジネス) には特に有利である。自由な市場競争に任されていない。官民パートナーシップは、リスクのほとんどを官 (税金) が引き受け、利益の大半は民間企業が得る。新自由主義では、競争による淘汰がなされることが社会の発展と繁栄を導くのであるが、現実には少数の多国籍企業の寡占や独占が強化されている。そして、このような多国籍企業は、収益を低課税地域や租税回避地 (tax heaven) に籍を置くペーパー・カ

ンパニーに移転し蓄積する。新自由主義の実践においては、自由とは、政治家に巨額の献金ができる大企業の資産隠しと税金逃れを意味する。国家は、税金逃れによって生じた税収の不足を一般国民からの徴税で補填するしかないの、新自由主義の実践によって、社会は繁栄するのではなく、重税によって困窮度が増す。

このような新自由主義の原則と実践のはなはだしい乖離が、自由とは相容れない「新保守主義」 (neoconservatism) を招いた (Harvey, [2005], 2007, 81-98). 新自由主義の実践による個人的利益をやみくもに追求するカオスは、市場競争を激化させ、過度な個人主義は無政府状態を生み出し、あらゆる社会的連帯の絆を破壊する。そうすると、秩序回復のために強制が必要となり、警察の権力の強化や軍事化が促進される。まさに、自由の侵害が起きる。

ハーヴェイは、結論として次のように述べる。「市場は競争的で公正であるという理念は、企業と金融の途方もない独占化、集中、国際化という事実によってますます否定されている。各国内でも (中国、ロシア、インド、南アフリカなど)、国際的にも、階級間・地域間の不平等が驚くほど拡大したことは、新自由主義世界が完成する途上での「過渡的」なものであると言ってごまかすことがもはやできないほどの深刻な政治的諸問題を生じさせている。新自由主義が、支配階級の権力回復という (成功した) プロジェクトを偽装するための (失敗した) 空想的レトリックであることが認識されればさるほど、平等主義的な政治要求を唱え、経済的公正、フェアトレード、より豊かな経済保障を迫りする民衆運動が復活していく基礎が築かれていく」と (Harvey, [2005], 2007, 203-04/渡辺監訳, [2007], 2014, 280).

ハーヴェイの提示する「公式教義からの実践の逸脱」のおびただしい数の事例を読むと、確かに新自由主義は、「支配階級の権力回復」の道具であったと認めざるをえない。1990年代より盛んになった悪者 (villain) としての新自由主義観が定着したのも無理はない (Kurecic & Vusic & Primorac, 2013).

2.4 新自由主義は未完のプロジェクト

前項において、今のところ、新自由主義の実践は失敗に終わりつつあるということが確認された。実践する側の政府や企業や諸個人の愚劣さによって、偶然にそれら実践の失敗が起きたのではなく、新自由主義は意図的に逸脱悪用され、支配層の権力強化に貢献するイデオロギーとなったということが確認された。

とはいえ、ハーヴェイは、新自由主義の原則そのものまでは否定しなかった。新自由主義が創造的破壊を伴うものであるため、その実践の途上にさまざまな問題が生じることは認めていた (Harvey, 2007)。

しかし、ジョゼフ・E・スティグリッツ (Joseph E. Stiglitz) は、「市場は適切な時間枠の中で自己修正しないし、国全体が不景気や不況に突入しているとき、政府がのんきに傍観を決め込むことは許されない」と述べている (スティグリッツ, 2015, 460)。つまり、新自由主義の原則そのものが無効であると示唆している。「成長のための左傾化」を提唱している。今や、新自由主義という思想は息の根をとめられつつある。

しかし、それでも疑問は残る。政府の介入は不可避であるとスティグリッツは言うが、その思考は、やはり八代尚宏が言うところの「賢人政治」支持ではないのか (八代, 2011, 6)。政府という賢人が、資源配分や所得配分をするほうが、個人や個別の企業の創意工夫に任せるより、うまくいくと本当に信じているのか。

この発想の限界は、すでに認識されているはずだ。1989年のベルリンの壁崩壊以後、旧ソ連や東欧諸国は市場経済化に進んだ。社会主義こそ、賢人思想の産物であった。それは失敗に帰した。なのに、「今や政府の市場介入を重視する社会主義思想が価値を変えて復活しつつある」 (八代, 2011, 6)。同じ間違いが、やはり繰り返されていくようだ。

今後の世界が採用する経済政策が、新自由主義の原則にもどるものであるのか、ケインズ主義の復活

なのか、もしくは折衷的なものになるのか、もしくは別のもの (alternative) が生まれるのか、筆者にはわからない。しかし、これまで見てきたように、新自由主義を前提として「邪悪な悪者」(villain) として見て否定することは間違っている。新自由主義は、いまだ真の意味では実践されていないのだから。恣意的に口実に使われて誤用されてきたのだから。それを認識しない無知と知的怠慢について指摘することが、本項の目的であった。

このように新自由主義に対する誤解について理解したうえで、次の項では、アイン・ランドの思想と、(今までのところ) 実践されて失敗に見える新自由主義を同一視することの愚を指摘する。

3 アイン・ランドの思想について

アイン・ランドは、1926年21歳のときにソ連からアメリカに渡り、そのまま亡命した。1929年のニューヨーク株式大暴落から始まった大不況期に、つまり人々がソ連の社会主義に希望を託していた時代に、『われら、生きるもの』(*We the Living*) など、ソ連体制を告発する作品を書くことで作家活動を始めた。

1943年に発表した『水源』(*The Fountainhead*) においては、大不況期のローズヴェルト政権のニュー・ディール政策の集団主義を批判した (Szalay, 2000, 75-161)。大不況期の失業対策として設置された機関である公共事業促進局 (Work Projects Administration, WPA、もとは Work Progress Administration 雇用促進局) を使って、芸術家の失業対策という名目で、個人の自由な才能の発露から生まれる芸術活動まで管理規制する時代の潮流に抵抗する孤高の天才的建築家の半生を描いた。

第二次大戦後には、市場競争や個人の創意によるビジネス・チャンスの開拓や起業を抑圧し、私的所有権を否定する計画統制経済のために疲弊し機能しなくなったアメリカを捨てて、新生アメリカをコロラド山中に形成する産業資本家や企業家や発明家たちを祝福する『肩をすくめるアトラス』(*Atlas Shrugged*, 1957) を発表した。

リチャード・ホフスタッター (Richard

Hofstadter：1916-70)が「大半のアメリカの知識人はビジネスを知性の仇敵ととらえてきた」(Hofstadter, 1962, 233)と述べたように、人文学系の主流アカデミズムや主流言論界は、反産業資本、反企業であり続けているので、前述のような作品を書いたアイン・ランドは長く黙殺されてきた。保守主義(American Conservatism)やリパータリアニズム(libertarianism)の政治思想の文脈から、限定的に論じられるだけであった。

卓越したストーリー・テラーとしての資質については、ディーン・クンツ(Dean Koontz)やステューヴン・キング(Stephen King)などのミステリー作家の大物たちから賞賛されてきたのであるが(Koontz, 1981, 96-97/King, 2000, 173)。

1991年のソ連崩壊以後は、社会主義や計画統制経済や国家管理経済は機能しないというアイン・ランドの主張が結果的に正しかったということから、再評価されるようになった。しかし、今は反新自由主義の文脈から批判されている。

アイン・ランドは新自由主義の源泉であるという見解は、彼女の弟子のひとりであり、ランドの思想から大きく影響されたアラン・グリーンズパン(Alan Greenspan)が、アメリカの中央銀行の連邦準備制度理事会(Federal Reserve Board, FRB)の議長を長年(1987-2006)勤めたということが影響している。グリーンズパンの市場を放置するという無為無策が、リーマン・ショックに代表されるアメリカの金融危機を招いた理由のひとつであり、それはグリーンズパンが師のランドが提唱した「自由放任資本主義」(laissez-faire capitalism)の信奉者であり、自己利益を追求する強欲を肯定したからだと指摘されている(Weiss, 2012, 211-221)。

本論2において、「新自由主義」は「自由放任資本主義」ではないこと、真に市場に全てを委ねるようなものではないこと、及び現行の新自由主義批判が、その実践の意図的な悪用誤用を批判することに集中し、その原則の有効性を吟味していないことが指摘された。3においては、ランドの思想内容、特に彼女の資本主義観を確認する。

3.1 「客観主義」の確認

アイン・ランドが唱えた「客観主義」という思想は、形而上学的には客観的現実(Objective Reality)、認識論的には理性(Reason)、倫理的には自己利益(Self-interest)、政治的には自由放任資本主義(Laissez-faire Capitalism)の立場を採るといものである。以下は、『利己主義という気概』(The Virtue of Selfishness, 1961)に収録された「客観主義の倫理」("The Objectivist Ethics")というエッセイからアイン・ランドの哲学「客観主義」(Objectivism)の内容を、筆者がまとめたものである(Rand, [1961], 1964, 13-39)。

(1)人間は生き物である。生き物である以上は、生き延びることが目標である。人間が生き延びることに益になるものは「善」である。人間が生き延びるのに障害になるものは「悪」である。生き延びることに利益になることを求めなければならないという意味において、人間は利己的であらねばならない。一般的に言われる利己主義の意味は、「欲望のおもむくままに生きること」であるが、利己主義の本来の意味は「自己に利益があるようにすること」である。「欲望のおもむくままに行動すること」は自己利益に反するので、真の利己主義ではなく、単なる気まぐれである。

(2)人間が生き延びるということは、どうか。現実には人間の思惑とは関係なく存在する客観的実体である。人間は、現実を認知し把握することができるが、それを創造することも変えることもできない。たとえば、人間が水を望んでも水は出現しない。水のある場所まで移動しなければならない。人間は植物ではないから、移動せずとも日光や土の中の栄養素を吸収して生き延びることはできない。人間は、本能の中に生き延びるための行動がプログラミングされていない。獣のように身体能力が高いわけでもない。人間の場合は、すべてを学習しないと、生き延びることができない。脳の力、思考力だけが、人間の持つすべてだ。人間は、思考力によって、自分の欲望や願いでは変わらない現実働きかけ、自らにとって価値あるものを獲得し生産することによって生き延びる。人間の英雄性は、このよう

な生産性にある。

(3) 思考とは何か。人間の諸感覚が捉えた事物をそれと確認し (identify), 他の事物と関連付け統合する (integrate) 過程が思考である。この思考を稼働させる機能が理性 (reason) である。理性だけが、人間が客観物である世界に対処して生き抜く知識を獲得する手段であり、行動への適切な指針である。頭脳と身体を適切に使って現実に対処し、自分が生き延びるために利益になるものを入手できれば、その思考と行動は合理的である。それに失敗するのは思考と行動が合理的でなかったということである。思考と行動において合理性がないと、しかも長期的視野に基づいた合理性がないと、人間は生き延びることができない。

(4) したがって、信仰や感情を知識獲得の手段とする神秘主義や、確実な知識は人間には獲得不可能なものという懐疑主義は否定される。また、人間存在が、運命とか育ちとか遺伝子とか経済状況の犠牲者であるとする決定論も否定される。人間の生は、客観的実体である現実に対処し生き延びることに利益になることを選択し実践するという合理的な思考と行動の蓄積であって、それ以外のものではない。

(5) そういう存在としての人間が、そういう存在としての人間と関わるといことは、互いの合理的な思考と行動によって獲得した価値あるものを、合意の上で交換するという関係でなければならない。互恵的關係でなければならない。したがって、正しい人間関係は、すべて交易者、商人 (trader) の関係である。愛情関係や友情関係も、互いが生み出した価値の交換関係である。この意味において、「無償の愛」はありえない。「利他主義」はありえない。ありえない利他主義を推奨する人々は、他人が生み出した価値と交換されるにふさわしい価値を生産し提供することなしに、他人が生み出した価値を手にしたいたかり屋か、搾取者か、寄生虫である。

(6) 上記のような人間の条件と人間関係のあり方を守る事が道徳であるが、この道徳の実践を擁護する経済体制は資本主義である。個人間の合意のうえでの交換関係、合理的な自己利益に基づく交換行為に干渉し規制する体制は邪悪である。したがっ

て、自由放任資本主義が道徳的経済体制である。ただし、資本主義はいまだ完全には実現されたことがない「未来のシステム」である。なぜならば、道徳の実践の不足により、互恵的交換関係ではない利他的な搾取関係は、いろいろな形で残っているからである。世界史上初めて、資本主義社会として建国されたアメリカ合衆国も、混合経済や経済統制をまめがれていないからである。

(7) この道徳の実践を擁護し、個人の生き延びる権利と、それに伴う所有権を保護する政治体制は、夜警国家である。合理的な思考と行動によって獲得した価値あるものに対する個人の所有権が守られないということは、人間の生そのものが冒瀆されることである。それらの個人の諸権利の侵害は、具体的には物理的強制力 (暴力) の行使によるので、政府は、物理的強制力 (暴力) の行使を抑止する物理的強制力 (暴力) を持たなければならない。その力の行使は、恣意的であってははいけない。個人の諸権利を侵害する暴力に報復し反撃するときのみ、力の行使がゆるされる。

(8) 物理的強制力からの脅威がなければ、生き延びるために合理的で長期的視野に基づいた自己利益のための活動に人々は専心できる。そのような人間で成立する自由な社会は発展し繁栄する。それ以外のことに政府が介入し規制することは、国民の合理的な思考と行動の自由な実践を抑圧する。ひいては、それらの自由な実践によって形成される自由で豊かな社会の発展を阻害する。統治機関による規制は、その規制行為に従事する官僚組織の肥大を招き、税金公金浪費が増大する。そもそも、政府運営資金は、政府が提供するサービスに対する国民からの「自主的支払い」である (べきだ)。略奪者による物理的強制力を抑止する公的機関である裁判所と警察と軍の運営に対する「自主的支払い」である (べきだ)。国民の収入は政府や官僚の所有物ではない。「公」とは、政府や官僚組織の中のある個人の私物に転化する危険が常にある。政府や公的機関が、国民にとって最大の略奪者にならないように、最悪最強の公設暴力団にならないように、私人である個人の国民は常に警戒しなければならない。

3.2 アイン・ランドの資本主義観

前述のハイエクは、社会主義や共産主義ではない経済体制を「資本主義」と呼ぶのはmisleadingであると言った(Hayek, 1963, 15)。「資本主義」という用語は、1854年に社会主義者の歴史解釈から生まれたものであり、過渡的な遅れたものという意味を持たされて生まれた。社会主義という思想が生まれなければ、資本主義という概念も生まれなかった。したがって、「資本主義」と私たちが口にするとき、前提として否定的意味合いをそこに含ませてしまう。社会主義は実践されてみたら機能しなかった。社会主義に代わる新しい思想もないので、なじんだ資本主義体制を「今のところは、とりあえず受け入れるしかないもの」として私たちは受け容れている。

とはいえ、資本主義の定義をしると言われると私たちは困る。資本主義とは、「経済の仕組みの一種で、資本の運動が社会のあらゆる基本原理となり、利潤や余剰価値を生む体制である」(Wikipedia, 2016年9月29日閲覧)と言われても、よく理解できない。資本主義の特徴は、「私有財産制と、私企業による生産と、労働市場を通じた雇用、労働と、市場における競争を通じた需要、供給、取引価格の調整、契約の自由」(Wikipedia, 2016年9月29日閲覧)と言われると、腑に落ちるような気もする。しかし、これらの特徴は、資本主義社会に生きる私たちにとっては、あまりに当たり前の所与の自然環境であるので、それらの特徴こそが資本主義であると言われると、それ以外の経済のありようが存在するのかと不思議になる。私たちは、真の意味では、資本主義を把握できない。資本主義体制は、あまりに自然化されているから。

しかし、アイン・ランドは違った。彼女は、資本主義を無自覚に所与のものとして受け入れている人間ではなかった。帝政ロシアの封建制を残しながらも商業が発達していた資本主義社会のプチブルジョワ家庭に生まれ、革命後の社会主義による国家統制経済を少女期から経験し、アメリカ亡命後にはアメリカの資本主義を体験し、大不況期の左傾化したアメリカ社会を目撃した。つまり、ランドは、資本主

義の外部に立ったことがある。資本主義を自然環境化する状態に埋没していられなかった。だからこそ、彼女は資本主義がどういう体制のものであるか、彼女なりに言語化できた。

たとえば、彼女は『利己主義という気概』において、こう述べる。

A pure system of capitalism has never yet existed, not even in America; various degrees of government control had been undercutting and distorting it from the start. Capitalism is not the system of the past; it is the system of the future---if mankind is to have a future. (Rand, [1961], 1964, 37)

(純粋な資本主義制度というものは、いまだかつて存在したことがない。アメリカでさえ、そうである。政府による規制が様々な程度にあり、それは最初から資本主義というものを切り崩し、歪めてきた。資本主義は過去の制度ではない。未来の制度である。ただし、人類に未来というものがあればの話だが)

ランドのこの言葉は、かなりの衝撃力を持っている。資本主義はまだ実現されていない？それは、どうということだろうか。

Money is a tool of exchange, which can't exist unless there are goods produced and men able to produce them. Money is the material shape of the principle that men who wish to deal with one another must deal by trade and give value for value. Money is not the tool of the moochers, who claim your product by tears, or of the looters, who take it from you by force. Money is made possible only by the men who produce. Is this what you consider evil? (Rand, [1957], 1992, 382)

(カネとは交換の手段です。もし生産される物がなければ、人間が物を生産できなければ、交換というものは存在しません。他の人間と取り引きしたい人間が、交易によって取り引きする

という行為、つまり価値ある物を得るために別の価値ある物を与えるという行為の原則の物質的形がカネです。カネはたかり屋の道具ではありません。たかり屋は哀れっぽく泣いてあなたの生産物を所有することを主張します。カネは略奪者の毒でもありません。略奪者や不正利得者は、あなたからあなたの生産物を暴力で奪います。カネは生産する人間によってのみ可能にされるものです。これを、あなたは悪とおっしゃいますか?)

以上は、『肩をすくめるアトラス』の登場人物のひとりが、他の登場人物が「カネは諸悪の根源だ」と言ったときに返す言葉である。さらに、この登場人物は次のように語る。

To the glory of mankind, there was, for the first and only time in history, a *country of money*—and I have no higher, more reverent tribute to pay to America, for this means: a country of reason, justice, freedom, production, achievement. For the first time, man's mind and money were set free, and there were no fortunes-by conquest, but only fortunes-by-work, and instead of swordsmen and slaves, there appeared the real maker of wealth, the greatest worker, the highest type of human being—the self-made man the American industrialist. (Rand, [1957], 1992, 384)

(人類にとって幸いなことに、史上で唯一初めて、カネの国が出現しました。道理、正義、自由、生産、業績の国たるアメリカに、これより高い敬虔な賛辞を私は奉げられません。はじめて人間の精神とカネは解放され、征服によって得られる財産がなくなり、仕事によって得る財産だけになりました。こうして、殺し屋と奴隷のかわりに、真の富の生産者であり、最高の労働者であり、最高に高邁なタイプの人間、つまり独立独行のたたきあげの人間、つまりアメリカの実業家が生まれたのです。)

以上のふたつの引用文は、小説の登場人物でも主要な人物が語るもので、ほぼアイン・ランドの思想表明であると考えていい。これらと前項3.1で確認したランドの思想内容から、彼女の資本主義観を筆者なりにパラフレーズすると以下ようになる。

(1) AがA自身の知力体力の発揮＝労働により生産し獲得したものと、BがB自身の知力体力の発揮＝労働により生産獲得したものを、AとBそれぞれにとって自己利益になるので、合意の上に交換する。このような合意の上の等価交換取引関係を、いつでもどこでも自由に実施する自由があり、その自由が法的に守られるシステムが資本主義である。自身の知力体力の発揮＝労働により生産獲得したものに対して持つ権利＝所有権こそ、人間の尊厳を守る。個人の所有権を守るシステムは資本主義である。よって、資本主義こそが道徳的に正しい。

(2) このような合意の上の等価交換取引関係が人間間に成立するという事は、交換し合う価値があるものを生産できる能力を人間が持っていることを前提としている。同時に、価値あるものを合意のもとに交換することができる信頼関係を人間が形成できることを前提としている。すなわち、資本主義は、人間の理性と能力を前提とし証明するので、道徳的である。

(3) カネ、貨幣とは、人間が労働によって生産した価値あるものを、別の人間が労働によって生産した価値あるものと交換する行為の蓄積反復の歴史から生まれた交換媒体である。「カネは諸悪の根源」という見解は、逆説的に貨幣を物神化しているからこそ生まれる。貨幣の発生と機能の根源を考えれば、貨幣は素晴らしい。貨幣の誕生は、人間が価値あるものを生産できる能力があるという証である。人間が価値あるものを、同じくらいに価値あるものと公平に交換できるという人間の信頼性の証である。

(4) ただし、世界には、自分の知力体力の発揮＝労働によって価値あるものを生産できる人間と、生産できない人間がいる。生産できる人間は、生産できない人間によって寄生される。公平な等価交換取引関係が成立せずに、生産するものが、生産しない

ものから生産物を一方的に略奪されることは歴史上おびただしく起きてきた。すなわち所有権の蹂躪は、圧倒的に多かった。それが政治体制として続いてきた。王政や貴族制がそうである。労働によってではなく、必要に応じて生産物が分配される社会主義や、全てが共有される共産主義も、所有権を蹂躪するシステムである。政府が個人間の自由な交易交換である商行為を規制する統制経済は、道徳に反する。市場は、個人間の合意に基づいた自由で公平な交易交換関係が展開される空間であり、政府が介入してはならない。だから、自由放任資本主義は正しい。

(5) アメリカ合衆国は、王政、貴族制から脱し、自分の知力体力＝労働によって価値あるものを生産する人々によって建国された史上初めての唯一の国家である。だからこそ、アメリカ合衆国の意義は大きい。

以上のように、ランドが言うところの資本主義とは、相互利益のある合意に基づいた自由で自主的な交換関係のことであり、それを法的に保障する体制のことであり、搾取や略奪が介在しない人間関係が問題とされる。ランドの資本主義観の前提となる世界観は、「世界は自分の力で生産する者と、他人の生産物に寄生して生きるものが相克する場所」ということである。ランドにとって、歴史は「他人の生産物に寄生して生きる者から、自分の力で生産する者を解放する過程」である。人類の進歩とは、個人が自分の労働によって獲得したものを奪われない度合いが増加することである。

だからこそ、ランドの資本主義観においては、資本主義は道徳である。人間の美德の産物である。だからこそ「いまだ厳密には実現されていない理想」である。ランドにとっては、過去の資本主義も現在の資本主義も、みな似非資本主義である。一般に考えられている資本主義がもたらす問題や、その結果のひとつとしての社会主義や共産主義の台頭は、資本主義がもたらす問題が原因なのではない。資本主義が足りないから生じる問題なのだ。公平な交換関係が個人間に成立していないから生じる問題なのだ。

ランドは、『資本主義---いまだ知られざる理想』(Capitalism: The Unknown Ideal) というタイトルのエッセイ集を1967年に出版している。なぜ、私たちが所与のものとして自然化している資本主義が、「いまだ知られざる理想」なのか。つまりランドが説くところの資本主義の原則が機能していないことが、資本主義が悪であることの根拠とされるという倒錯的な事態がまかり通っている。だから、資本主義は「いまだ知られざる理想」なのだ。

3.3 アイン・ランドの資本主義観の特異性

ランドの資本主義観は、あまりにランド独特であり、他の資本主義擁護論とも違う。たとえば、「原子論的個人主義」(田中, 2002, 65) と批判されるアダム・スミスより、はるかに個人主義的である。ランドとスミスの違いについては、ロバート・ホワイト (Robert White) の論文「アイン・ランド対アダム・スミス」("Ayn Rand versus Adam Smith") が詳細で詳しいが、「全体としての社会の良き物は、個人が自己利益を追求することで最も促進される」(White, 2005, 143) と述べた点において、スミスは決して原子論的個人主義者ではない。スミスの『富国論』(The Wealth of Nations) は一種の強国論である。国家の富の増進は、個人が利己的に自己利益を追求することで達成されると考える点において、スミスは集団主義である(脇坂&ブルック, 2016, 46)。しかし、ランドにとって問題なのは、あくまでも個人である。人間は個人でしかないからだ。国家という集団のために生きているわけではないからだ。自分のために生きているからだ。だから、個人が利己的に自己利益を追求するのは道徳なのである。

またランドの資本主義観は、前述のハイエクやミューゼスなどのオーストリア学派経済学者とも違う。彼らは、経済というものは、人工的に制御したり誘導できるものではないと考える。彼らは、市場に任せようが、結果として有効に展開するという功利主義的観点から、自由市場を支持した (Sciabarra, 1995, 284)。しかし、ランドは資本主義が、個人の所有権を守る「道徳」だから支持した。

かくも、アイン・ランドの資本主義観とは、資本主義というより、「ヒューマニズム」と呼ぶほうが妥当なほどに、原理的であり根源的である。あまりに当たり前のことを指摘しているだけだと見えるかもしれない。資本主義にせよ、社会主義にせよ、新自由主義にせよ、これらは思考モデルなので、現実の諸相にあてはめれば、すべての主義は、どこまでいってもモデルから逸脱する。それらは、「未完のプロジェクト」であり、「いまだ知られざる理想」にならざるをえない。この点から見ても、ランドの主張はナイーブに過ぎる。

皮肉にも、放任資本主義を祝福し、社会主義などの統制経済を呪ったアイン・ランドは、カール・マルクス (Karl Marx) やフリードリッヒ・エンゲルス (Friedrich Engels) などの社会主義者たちと同じ問題意識を共有している。マルクスにしてもランドにしても、起源にあるのは、公平さ (fairness) が実現されない世界への怒りである。人々の知力体力の発揮＝労働によって人々が獲得し生産したものを搾取するシステムへの怒りである。社会科学者のマルクスは、公平さという正義の実現のために、資本、労働、商品の仕組みを考察し、社会主義を唱えた。一方、文学者のランドは、同じ怒りから、あくまでも個人の生きかたに焦点を置き、個人間の公平で自由な交換関係が自由な市場で実現されることが道徳であり、だから資本主義が正義だと唱えた。

あくまでも、人間の生きかた、個人の心のありように注目する文学者の発想だからこそ、『肩をすくめるアトラス』のようなアイン・ランドの「資本主義礼賛寓話」は読まれ続けてきた。いかに素朴で原理的で根源的過ぎて、破格の資本主義観であろうと、アイン・ランドの資本主義観は、どんな政治経済体制であろうと、それを維持機能させるのは、人間間にある信頼であることを教えてくれる。公平な取引交換関係ができる人間同士の間には、つまり道徳を守る人間どうしの間には、資本主義は機能しないのだ。企業と繁栄を生み支えるのは「高信頼社会」であると、『「信」無くば立たず』(Trust) において説いたフランシス・フクヤマ (Francis

Fukuyama) とアイン・ランドは同じ問題を提示している。

2001年12月にエンロン (Enron Corporation) が破綻したとき、『肩をすくめるアトラス』が、あらためてアメリカのビジネスマンによって読み直された (Roger, 2010)。エンロンはテキサス州ヒューストンに本拠地を置き、総合エネルギー取引とITビジネスを行う企業だった。2000年度全米売り上げ第7位という大企業だった。2001年には21,000名の社員を抱えていた。しかし、内実は巨額の負債を不正経理や不正取引で隠蔽していた。絶え間なくイノベーションに挑戦し、価値あるものや新しいサービスを生み出し、消費者に提供するのが企業であり、ビジネスの根本である。しかし、いつのまにかアメリカのビジネスマンは、価値あるものや新しいサービスではなく、株価操作によって企業の評価を高める本末転倒なマネーゲームに一喜一憂するようになった。エンロン破綻は、アメリカのビジネスマンに、そのような虚業的ビジネスの退廃と背徳性を改めて認識させた。指針を失いかけていたビジネスマンが、企業家としての自分たちの原点や使命を思い出し再確認するために、『肩をすくめるアトラス』を読み直した。

ちなみに、『肩をすくめるアトラス』は「自己啓発書」として分類されている (ボードン, 2005, 326)。1991年に国会図書館 (The Library of Congress) とブック・オブ・ザ・マンズ・クラブ (the Book-of-the-Month Club) は、共同で「あなたが人生で最も影響を受けた本」について、ビジネスマン対象に調査した。聖書の次に、『肩をすくめるアトラス』が選ばれた。こうした結果は、『肩をすくめるアトラス』がアイン・ランドの道徳としての、美德としての資本主義観を物語化したものだからこそ生まれた。公平で自由な取引交換関係としてのビジネスを祝福する小説だからこそ生まれた。「自己啓発書」というものは倫理的なものである。アイン・ランドの思想の倫理性を読者は知っている。

4 結論---アイン・ランドは新自由主義の実践の失敗とは関係ない

本論の目的は、「アイン・ランドは（悪しき）新自由主義の源泉のひとつである」というアイン・ランド批判言説の誤りを2点から指摘することだった。本論では、まず新自由主義という思想と、新自由主義の名の下に実践されてきた政策の破綻と失敗を同一視することの愚を指摘した。新自由主義を悪と前提することの知的怠慢を指摘した。新自由主義を「強欲資本主義」と同義語として邪悪なものとしてみることは、現行の知的風土の前提である。しかし、新自由主義という思想と「新自由主義と呼ばれる現象」とは別である。新自由主義は、いまだほんとうには実践されていない未完のプロジェクトである。

次に、本論はランドが唱える思想に使用される言葉の意味を検証せずして、ランドは利己主義を肯定したのだから強欲資本主義の提唱者であると断じることの愚を指摘した。彼女が肯定した「利己主義」とは、長期的視野に基づく合理的なものである。「気まぐれな自分勝手」では長期的には自己利益は確保できない。

ランドが支持した「道徳としての資本主義」は、あくまでも等価交換をする自由な交易者どうしの関係を意味する。搾取と物理的強制力から解放された自由な個人間の関係を法的に保障するのが、ランドにとっての資本主義である。その個人を守ることで以外のことに国家は介入しないという意味での自由放任資本主義をランドは提唱した。したがって、アイン・ランドに対する新自由主義加担を批判するのは的外れである。アイン・ランドの思想は、ハイエクやミーゼスやフリードマンのそれに似ているかもしれない。が、根本的に違うのだ。

そもそも、新自由主義の実践（と呼ばれる悪用）が生んだパソコンの端末を操作して巨額の利を得ようとするデリバティブ取引とか、サイバー資本主義とか金融資本主義など、アイン・ランドの想像外にある。アイン・ランドが寿いだのは、自分の知力体力の発揮＝労働によって価値あるもの生み出すアメリカの草の根から生まれた泥臭い19世紀的企業家

たちである。ドン・デリーロ（Don DeLillo）の『コズモポリス』（Cosmopolis）の主人公のように、リムジンに乗りながら、携帯電話で円キャリア・トレードのような金融操作で資金形成をするビジネスマンが寵児になるような時代と精神（の劣化）など、アイン・ランドには関係がない。ましてや、サブプライム・ローンを債権化したものを金融商品として売り出すビジネスマンには関係がない。それらの金融商品が破綻したときに保険金を受け取ることができるクレジット・デフォルト・スワップ（credit default swap, CDS）を「商品」として大量に売りさばき、保険金が払えないからといって政府からの公的支援（税金投与）を求めるような大企業とも関係がない。

ランドが示すように、長期的な視野に基づいた合理的な自己利益を考えれば、そのような商品など思いもつかないはずだ。ましてや、自分が購入したわけでもない債券が破綻すると保険金を得ることができるようなCDSを購入して、他人の破綻により保険金を得るような人々が存在しうることなど、アイン・ランドには信じられなかったであろう。自分の労働によって得た価値あるものを、他人が労働によって得た価値あるものと、合意の上に交換して互恵的な関係を築くのが自由で公平な人間関係であり、利他主義は搾取者やたかり屋の思考だと断じたアイン・ランドには信じられなかったらう。

アイン・ランドの思想には、いろいろ問題はあつた。それは事実だ。しかし、そのことは、「アイン・ランドは（悪しき）新自由主義の源泉のひとつである」という言説の是非を考える必要条件とはならない。

参考文献

<アイン・ランド関連>

- Brooks, Yaron & Don Watkins. 2012. *Free Market Revolution: How Ayn Rand's Ideas Can End Big Government*. New York: Palgrave Macmillan.
- DeLillo, Don. 2003. *Cosmopolis*. New York: Scribner Book Company.
- ドン・デリーロ. 2004. 『コ

- ズモボリス』上岡伸雄訳。新潮社。
- Donway, Roger. 2010. "Interview: The Fall of Ken Lay" in Atlas Society.
<http://atlassociety.org/commentary/commentary-blog/3655-interview-the-fall-of-ken-lay> 2016年9月15日閲覧
- Fukuyama, Francis. 1995. *Trust: The Social Virtues and the Creation of Prosperity*. New York: Free Press. フランシス・フクヤマ著。1996. 『「信」無くば立たず』加藤寛訳。三笠書房。
- Hayek, Friedrich A. [1944] 1994. *The Road to Serfdom*. Chicago: Chicago University Press. フリードリッヒ・A・ハイエク。[1992] 2008. 『隷属への道』西山千明訳。春秋社。
- Hofstadter, Richard. 1962. *Anti-Intellectualism in American Life*. New York: Vintage.
- King, Stephen. 2000. *On Writing: A memoir of the Craft*. New York: Pocket Books.
- Koontz, Dean R. 1981. *How to Write Best Selling Fiction*. Cincinnati: Writer's Digest Books.
- Rand, Ayn. [1936], 1996. *We the Living*. New York: Macmillan, New York: New American Library. アイン・ランド。2012. 『われら生きるもの』脇坂あゆみ訳。ビジネス社。
- Rand, Ayn. [1943], 1993. *The Fountainhead*. New York: New American Library, 1993. アイン・ランド。2004. 『水源』藤森かよこ訳。ビジネス社。
- Rand, Ayn. [1957], 1992. *Atlas Shrugged*. New York: Random House, 1957. New York: New American Library, 1992. アイン・ランド。2004. 『肩をすくめるアトラス』脇坂あゆみ訳。ビジネス社。
- Rand, Ayn. [1961], 1964. *The Virtue of Selfishness: A New Concept of Egoism*. New York: New American Library. アイン・ランド。2008. 『利己主義という気概』藤森かよこ訳。ビジネス社。
- Rand, Ayn. 1967. *Capitalism: The Unknown Ideal*. New York: New American Library.
- Sciabarra, Chris Matthew, 1995. *Ayn Rand, the Russian Radical*. University Park: Pennsylvania State University Press.
- Szalay, Michael. 2000. *New Deal Modernism: American Literature and the Invention of the Welfare State*. Durham: Duke University Press.
- Weiss, Gary. 2012. *Ayn Rand Nation: The Hidden Struggle for America's Soul*. New York: St. Martin's Press.
- White, Robert. 2005. "Ayn Rand versus Adam Smith" in *The Journal of Ayn Rand Studies*, Vol. 7, No.1 Fall. pp.141-180. Penn State University Press.
- 田中敏弘。2002. 『アメリカの経済思想』名古屋大学出版局
- 馬淵睦夫。2014. 『世界を操る支配者の正体』講談社。
- 藤森かよこ。2008. 「アイン・ランドの資本主義観：反ビジネス文学風土の中でビジネスマンを祝福した*Atlas Shrugged*」『桃山学院大学・人間科学論集』第35号219-249.
- 藤森かよこ。2013. 「衝動から思想へ---アメリカ保守主義の誕生とハイエク『隷属への道』」『都市経営』（福山市立大学）3号。9-26.
- 脇坂あゆみ&ヤーロン・ブルック。2016. 「公開講演会 アイン・ランドとアメリカ自由市場主義資本主義の底流」立教大学経済研究所。2016. 『立教大学経済研究所年報2016』34-56.
- <新自由主義関連>
- Harvey, David. [2005] 2007. *A Brief History of Neoliberalism*. Oxford: Oxford University Press. デヴィッド・ハーヴェイ。2007。2014. 『新自由主義---その歴史的展開と現在』渡辺治監訳。作品社。
- Harvey, David. 2007. "Neoliberalism as Creative Destruction. *The Annals of the American Academy of Political and Social Science*, 610.

(1)21-44.

Hayek, Friedrich A. 1963. *Capitalism and Historians*.
Chicago: University of Chicago.

Kurecic, Peter & Damir Vusic & Dinko Primorac.
2015. "Neoliberalism as a "Villain": A Content
Analysis of Theoretical Critical Stance Towards
Neoliberalism in the Text from Antipode---A
Radical Journal of Geography, 2010-2013."
Conference Paper (10th International
Scientific Conference on Economic and Social
Development, At Miami). September 2015
[https://www.researchgate.net/
publication/303896493_](https://www.researchgate.net/publication/303896493_2016年9月10日閲覧) 2016年9月10日閲覧

Turner, Rachel S. 2008. 2011. *Neo-Liberal Ideology:
History, Concepts and Politics*. Edinburgh:
Edinburgh University Press.

スティグリッツ, ジョゼフ・E. 2015. 『世界に
分断と対立を撒き散らす経済の罨』峯村利
哉訳. 徳間書店.

スティグリッツ, ジョゼフ・E. 2016. 『これか
ら始まる「新しい世界経済」の教科書』桐
谷知未訳, 徳間書店.

高田太久吉. 2011. 「経済危機と新自由主義の
「危機」」『唯物論研究年誌』第16号. 日
本共産党唯物論研究協会編. 大月書店. 39-
57.

友寄英隆. 2006. 『「新自由主義」とは何か』新日
本出版社.

服部茂幸. 2013. 『新自由主義の帰結---なぜ世界
経済は停滞するのか』岩波書店. 2008

ボードン, T・バトラー. 2005. 『世界の自己啓発
50の名著』野田恭子&森村里美訳. Discover
社.

ミクルスウェイト, ジョン&エイドリアン・ウール
ドリッジ. 2015. 『増税よりも先に「国と
政府」をスリムにすれば』浅川佳秀. 講談
社.

ワプショット, ニコラス. 2014. 『レーガンとサ

ッチャー---新自由主義のリーダーシップ』久
保恵美子訳. 新潮社.

八代尚宏. 2011. 『新自由主義の復権---日本経済
はなぜ停滞しているのか』中央公論社.

Ayn Rand and Neoliberalism

Kayoko FUJIMORI

Some critics say that Ayn Rand is the “fountainhead” of neoliberalism. This notion is the result of intellectual negligence in the following two points.

First, this notion is based on the premise that neoliberalism is a sort of villain. Neoliberalism has been blamed as the ideology behind the outbreak of the economic crisis that shocked the world in 2008 and 2009 and the present economic recession. But there are the contradictions between neoliberalism in principles and that in practice. Even those against neoliberalism notice that systematic divergences from the template of neoliberalism are apparent.

Second, this notion fails to grasp Ayn Rand’s thoughts, “Objectivism.” Rand stated that the proper purpose of one’s life is the pursuit of one’s own happiness (rational self-interest) and that the only social system consistent with this morality is *laissez-faire* capitalism with a separation of state and economics. Because full respect for individual rights is embodied in *laissez-faire* capitalism. Rand proposes a limited government that has a coercive monopoly on the use of physical force. Rand argues that the harmony of interests of individuals is inherent in the nature of a trade. A trade is an exchange from which both parties expect to derive a mutual benefit. We can safely say that Rand’s views about capitalism as morality have no connection with neoliberalism in practice.

Keywords : neoliberalism, Darwinian capitalism, creative destruction, self-interest, Objectivism

DOI : 10.15096 / UrbanManagement.0902